第3章

教育課程編成

西島　央

完全学校週５日制の導入に伴い、新しい学習指導要領では小・中学校の標準の授業時数や年間授業日数が以前より少なくなった。一方で、授業時数の設定や時間割の編成にあたって、地域や学校、児童・生徒の実態、各教科や学習活動の特質などに応じて、各学校が弾力的に幅をもたせて定めることができるようにもなった。これを受けて、学校の特色化を図るために、各学校では教育課程の編成にどのような工夫をしているのだろうか。本章では、授業時数の設定と時間割上の工夫、学校行事の実施状況を取り上げて教育課程編成の多様化の様子を検討する。

第１節

授 業 時 数 設 定

1. 年間総授業時数の設定

年間の標準授業時数を超える時数を設定している学校は、小学校で47.8％、中学校で14.8％である。小学校では、「標準より１～35時間多い」のが低学年で約10％、高学年で約15％、「標準より36～70時間多い」のが低学年で約15％、高学年で約10％、「標準より71時間以上多い」のが低学年で約15％、高学年で約20％であった。

学習指導要領に定められた年間授業時数は標準的なものであり、各学校が地域の状況や児童・生徒の実態に合った授業時数を定めることができるようになった。これを受けて、各学校ではどのような授業時数を設定するようになったのだろうか。

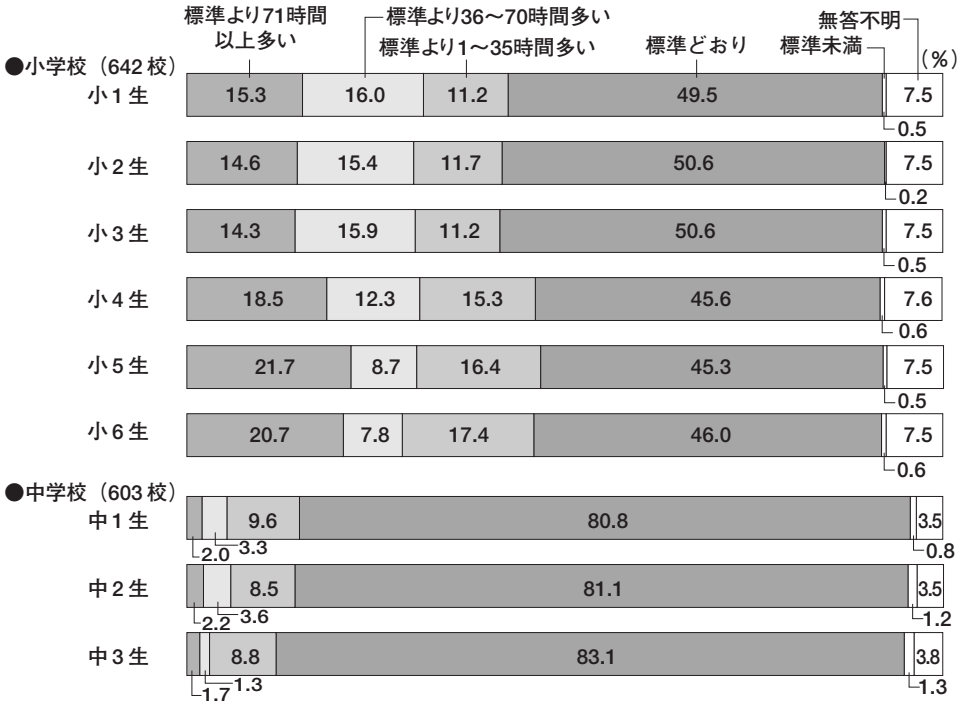
図３－１は、小・中学校の学年ごとの年間総授業時数の設定状況をまとめたものである。小学校で「標準どおり」に設定しているのは、低学年（小１生～小３生）が約半数、高学年（小４生～小６生）が45％ほどで、どの学年でも４割強が標準を上回る設定にしている。標準の年間総授業時数の上回り方としては、「標準より１～35時間多い」のが低学年で10％強、高学年で15％強、「標準より36～70時間多い」のが低学年で15％ほど、高学年で10％前後、「標準より71時間以上多い」のが低学年で15％前後、高学年で20％前後となっている。一方、中学校はどの学年も８割強が「標準どおり」に設定している。標準を上回る設定をしているのは１割強にすぎず、そのほとんどが「標準より１～35時間多い」ケースである。なお、標準を下回る設定は、小・中学校ともにほとんどみられなかった。

では、年間総授業時数の設定にあたって、学校全体としてはどのような傾向があるのだろうか。①全学年で標準を超えるか、一部に標準どおりを含む場合を「標準超過型」、②全学年で標準どおりを「標準型」、③１学年でも標準未満の学年がある場合を「標準未満型」の３タイプに分けた結果を**図３－２**にまとめた。中学校では「標準型」が約８割と大多数を占め、「標準超過型」は14.8％、つまり６校に１校程度しかないが、小学校では「標準超過型」が47.8％にも上り、「標準型」よりも4.7ポイント多く、標準を超えて年間総授業時数を設定する学校のほうが多数派になっている。

ところで、小学校の多様な年間総授業時数の設定は全国的にみられる傾向なのだろうか。**図３－３**のように地区別に「標準超過型」の割合をまとめてみたところ、非常に多いＡ地区とＬ地区では80％前後なのに対して、非常に少ないＨ地区やＤ地区では20％強にすぎず、「標準超過型」の割合は地区によって大きく異なっていることがわかった。

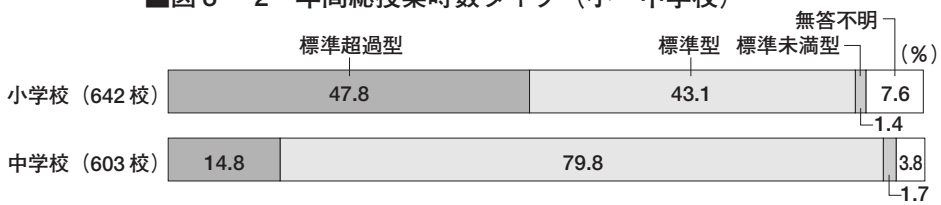
以上から、年間総授業時数の設定には中学校では多様性はみられないが、小学校では多様化が進んでいることが明らかになった。中学校には多様化を図りたくても標準を超えて授業時数を設定するだけの時間的余地がもうほとんど残されていないということだろう。また小学校についても、地域の状況や児童の実態を考慮して個々の学校の判断で授業時数を設定したというより、地区ごとの取り組みの違いを反映したものと考えられる。

■図３－１　年間総授業時数設定の状況（小・中学校／学年別）



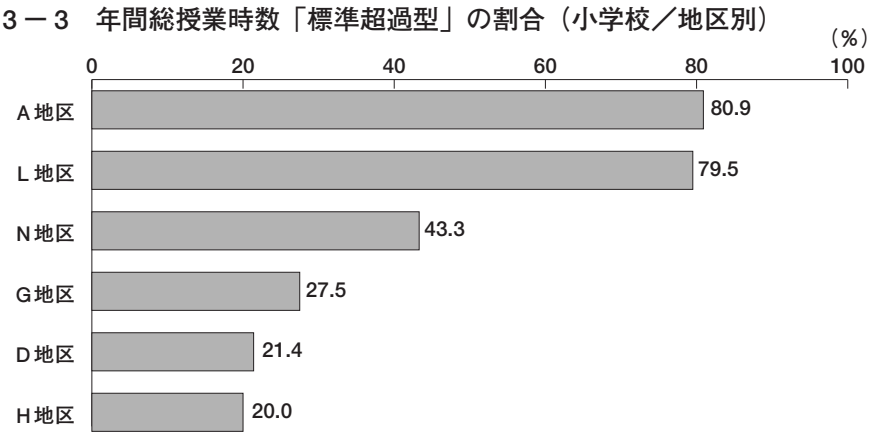
注）各学年について、各教科・領域等ごとに年間授業時数を数字で記入してもらったものを合計して作成した。

■図３－２　年間総授業時数タイプ（小・中学校）



注）年間総授業時数を、①全学年で標準を超えるか、一部に標準どおりを含む場合（標準超過型）、②全学年で標準どおり（標準型）、③１学年でも標準未満の学年がある場合（標準未満型）に分類した。

■図３－３　年間総授業時数「標準超過型」の割合（小学校／地区別）



2. 各教科・領域等の年間授業時数の設定状況

小学校で標準の年間授業時数を超えている教科・領域等は、最も多いのが「特別活動」の32.8％で、次いで「算数」の22.1％、「国語」の21.5％である。教科では標準よりも１～５時間程度超えて設定している学校が大半である。「特別活動」は標準を超えている学校のうち８割が、36時間以上超えている。

次に、各教科、「道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」の授業時数の設定状況について、小学校は小６生を、中学校は中３生を例にみていこう。

まず、小６生について**図３－４**をみてみると、各教科・領域等はいずれも７～８割程度が「標準どおり」の設定をしている。つまり、年間総授業時数が標準を超過しているのは教科や領域全般に多い設定になっているからではなく、一部の教科や領域だけが多くなっているためということになる。それぞれの教科や領域別に標準を超えている割合をみると、最も多いのが「特別活動」の32.8％で、次いで「算数」の22.1％、「国語」の21.5％となっている。「算数」と「国語」はこのうち３割ほどが「標準より６～10時間多い」設定を、４分の１ほどが「標準より11時間以上多い」設定をしている。また、「特別活動」は標準を超えている割合のうち８割が、「標準より36時間以上多い」設定をしている。ただしこの時数にはクラブ活動や学校行事、児童会などにあてる時間が含まれているようだ。

一方、標準を超えている割合が低いのが「道徳」6.5％と「総合的な学習の時間」8.1％だった。その他の教科や領域で標準を超えている割合は10％台で、標準を超えている時数も「標準より１～５時間多い」がほとんどだった。また、「標準未満」の設定は「総合的な学習の時間」の2.5％が目立つ程度でほとんどみられなかった。

では、個々の小学校では各教科・領域の年間授業時数を実際にどのように配当しているのだろうか。「標準どおり」以外で典型的なタイプを**図３－５**にあげてみよう。

①「全般型」（a、b）：aは年間総授業時数を標準より35時間多く980時間にして、bは年間総授業時数を1053時間と標準より100時間以上多くして、多くした時数を全教科・領域で分けているタイプで、多くみられた。

②「国・算型」（c、d）：cは年間総授業時数を標準より10時間多くして、dは年間総授業時数を標準より35時間多く980時間にして、多くした時数を「国語」と「算数」で分けているタイプ。

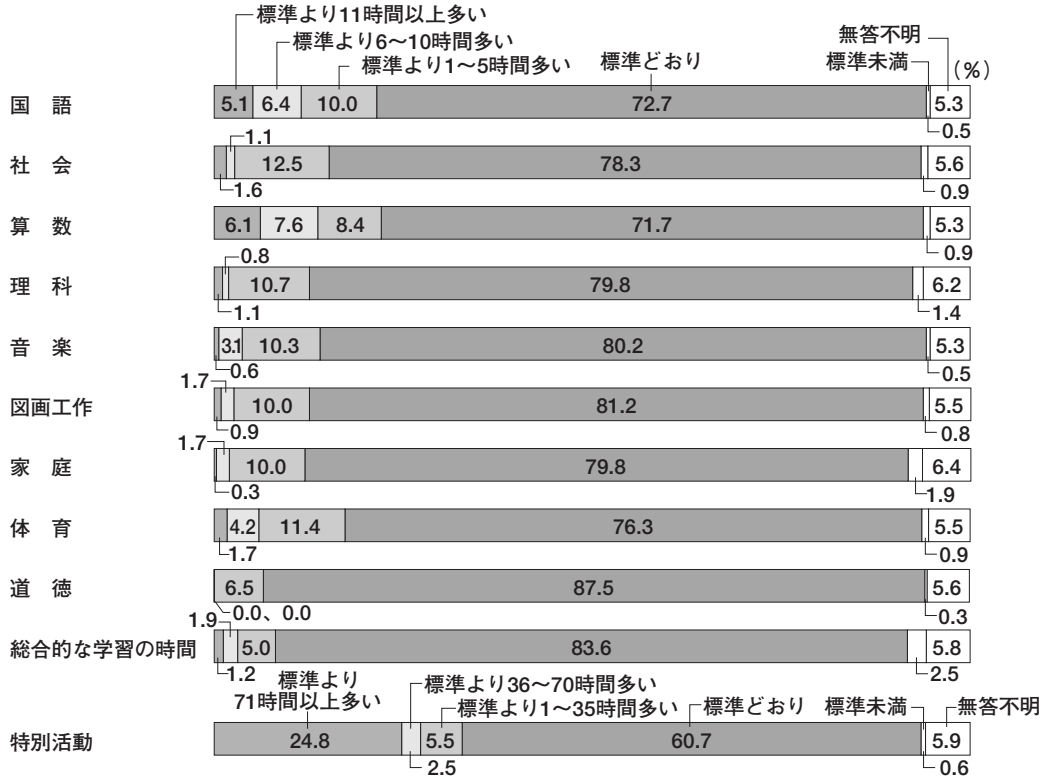
③「特活型」（e）：標準を超えている時数はすべて、「特別活動」のうち標準授業時数で示されている学級活動以外の学校行事、集会、委員会、クラブ活動の時間にあてているタイプで、多くみられた。

④「通常の教科・領域以外の時間を設定している型」（f）：年間総授業時数を標準より35時間多く980時間にして、多くした時数を通常の教科や領域等にあてるのではなく、「創意活動時間」「おぎない」などの名称で学校独自の学習活動の時間にあてているタイプ。

⑤「標準年間総授業時数の内訳を変えている型」（g）：年間総授業時数は標準の945時間ながら、その内訳を変えて一部の教科の時数が多くなるようにしているタイプ。

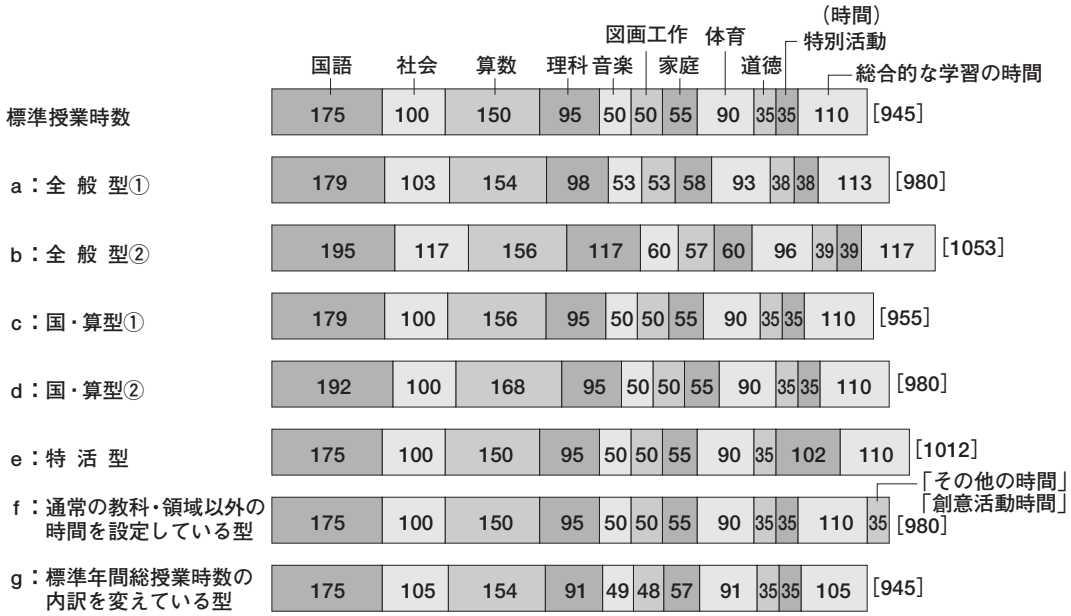
以上のように、たとえば980時間という同じ年間総授業時数であってもその内訳は様々で、小学校では教科や領域等の授業時数の配当まで含めた多様化が進んでいるようだ。

■図３－４　年間授業時数の設定状況（小６生／教科・領域等別）



注１）サンプルは小学校642校。
注２）年間授業時数を数字で記入してもらったものを、各教科・領域等ごとに合計して作成した。

■図３－５　教科・領域等の配当例（小６生）

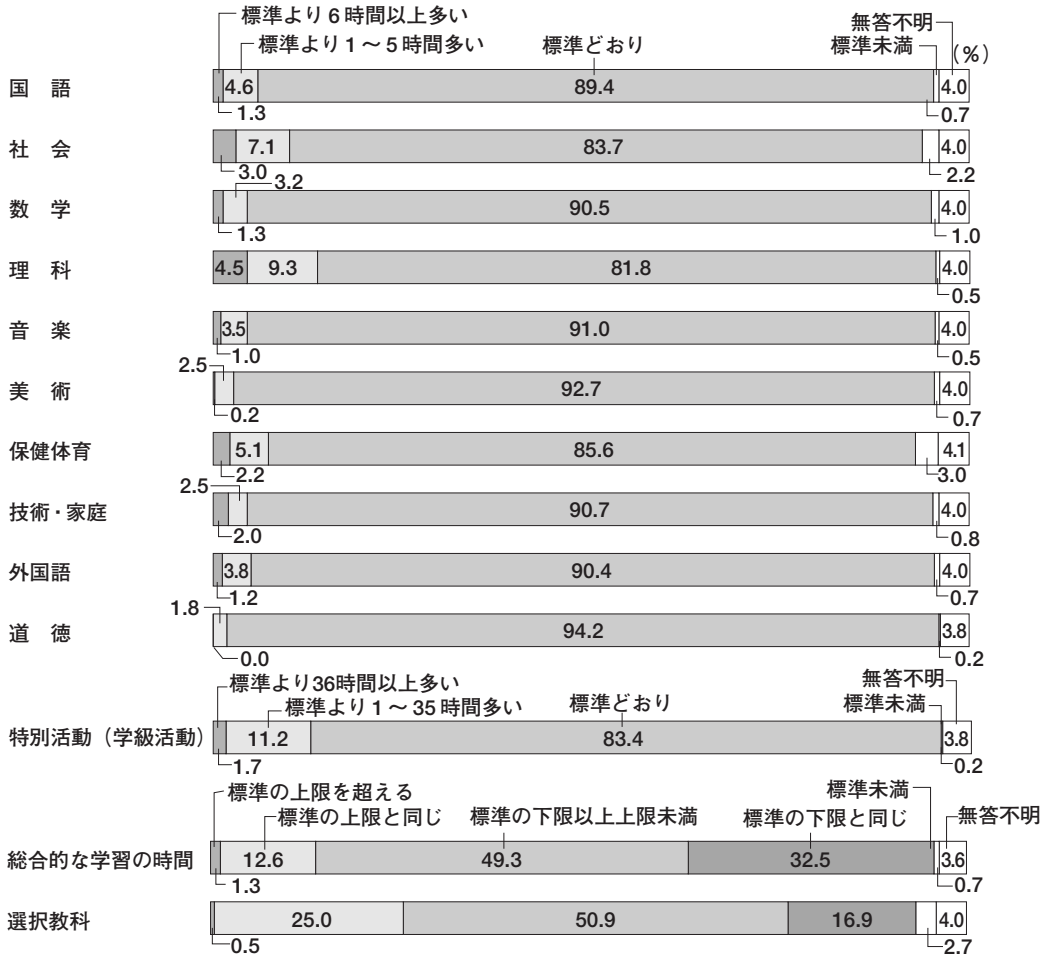


注）各校の回答から「標準どおり」以外の典型的なパターンについてモデル化したもの。

続いて、**図３－６**から中３生についてみていこう。「社会」と「理科」、「特別活動（学級活動）」で標準授業時数を超えている割合が10％強となっているが、それ以外の教科と「道徳」は９割前後が「標準どおり」の設定となっている。標準授業時数の設定に下限と上限が示されている「選択教科」と「総合的な学習の時間」は、９割以上がその範囲内に設定している。しかし、範囲内であっても、「選択教科」では「標準の下限と同じ」が16.9％、「標準の上限と同じ」が25.0％と幅がある。また、「総合的な学習の時間」は「標準の下限と同じ」が32.5％で「標準の上限と同じ」が12.6％となっている。「選択教科」のほうが、授業時数が多くなるように時数の幅を使っているようだ。なお、この傾向は配当されている授業時数も幅も少ない下の学年ほどより顕著である。

以上のように、中学校では教科や領域等に配当する授業時数としては目立った多様性はみられないが、選択教科の授業時数を上限に設定している割合が高いことから、選択教科の内訳によって多様化を図ろうとしていると考えられる。

■図３－６　年間授業時数の設定状況（中３生／教科・領域別）



注１）サンプルは中学校603校。
注２）年間授業時数を数字で記入してもらったものを、各教科・領域等ごとに合計して作成した。

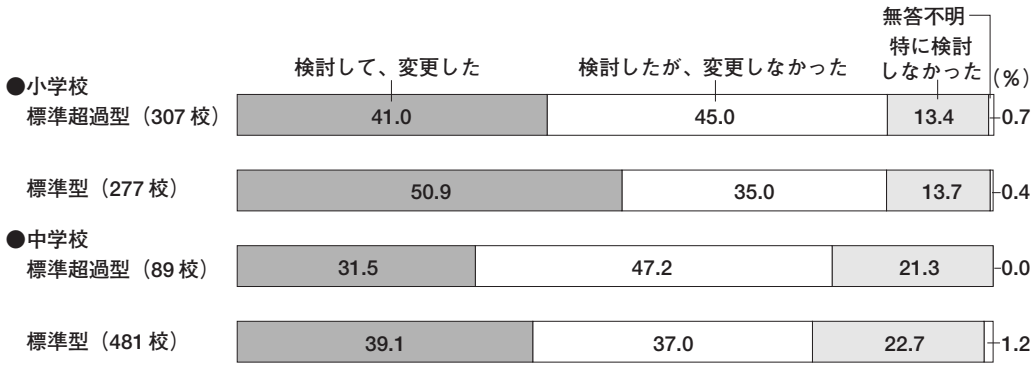
3. 授業時数設定の背景

授業時数設定にあたって、「標準型」の学校は96.8％が「全教科等で標準授業時数どおりの時数を確保する」工夫を、「標準超過型」の学校は48.5％が「標準授業時数に配慮しつつ、従来までの学力水準を維持できるような授業時間を確保」する工夫、38.1％が「『特色ある学校づくり』を考慮して授業時数を設定」するような工夫をした。

小学校では年間総授業時数の設定にあたって地区ごとの異なる傾向を示すことを先述したが、実際に標準授業時数とは異なる授業時数設定にするためには、学校の教育目標を検討して変更したり、標準を超える授業時数を確保するための工夫をしたりしていると考えられる。

そこでまず**図３－７**から、年間総授業時数の「標準超過型」と「標準型」の学校がそれぞれどれくらい学校教育目標を変更したかをみてみよう。「標準超過型」で「検討して、変更した」割合は小学校が41.0％で中学校が31.5％、「標準型」で「検討して、変更した」割合は小学校が50.9％で中学校が39.1％と、「検討して、変更した」割合は「標準型」のほうが約10ポイント高かった。しかもこの傾向は、図表には示していないが、地区別にみてもほとんど維持されていた。つまり、学校教育目標の変更は、新しい学習指導要領の示す教育観に合わせる方向での変更が多いが、それ以上に、年間総授業時数の設定は学校教育目標の変更によるものというより地区ごとの取り組みによるものだったということになる。

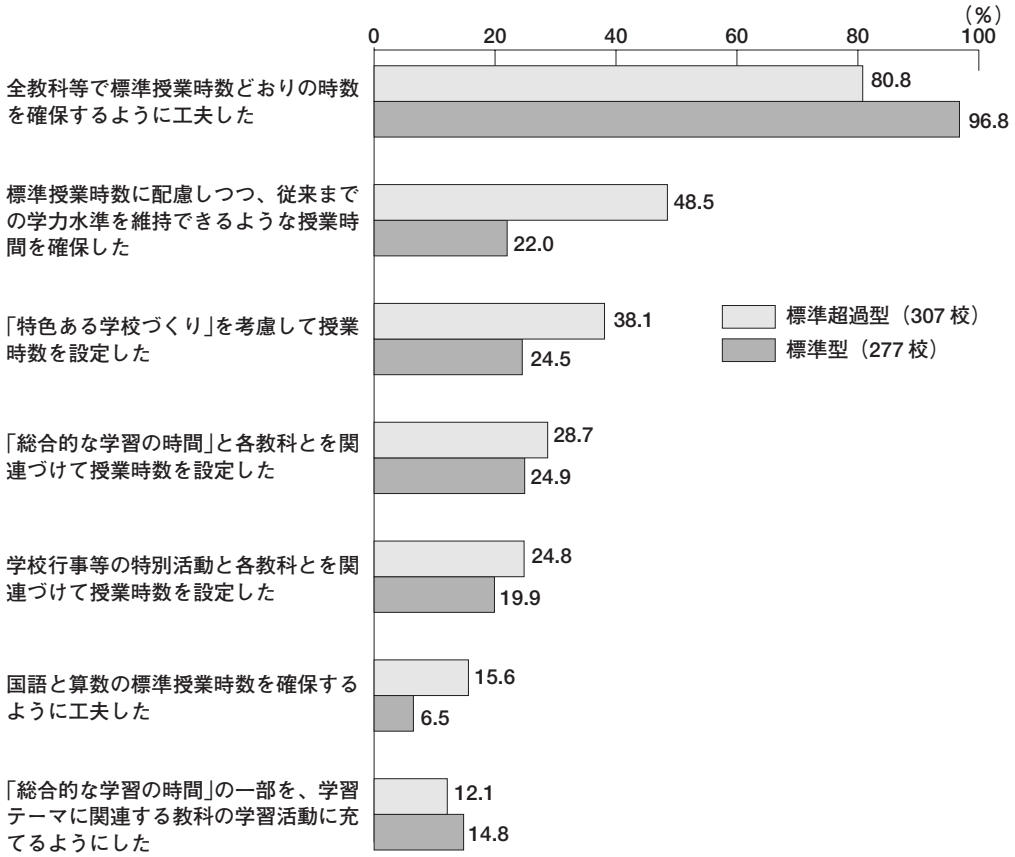
■図３－７　学校教育目標の変更状況（小・中学校／年間総授業時数タイプ別）



次に小学校では授業時数設定にあたってどのような工夫をしたかを、**図３－８**でみてみよう。「標準型」は96.8％が、「標準超過型」でも80.8％が「全教科等で標準授業時数どおりの時数を確保するように工夫した」としている。最も注目すべきは、「標準授業時数に配慮しつつ、従来までの学力水準を維持できるような授業時間を確保した」学校が、「標準型」は22.0％にすぎないが「標準超過型」では48.5％となっていることである。「標準超過型」の学校の約半数が学力水準の維持を意識して標準以上の授業時数を設定している。また「『特色ある学校づくり』を考慮して授業時数を設定した」割合も「標準超過型」が38.1％と「標準型」より13.6ポイント多くなっている。

このようにみると、たしかに授業時数の多様化の背景には、学校教育目標の変更や学力に対する配慮、「特色ある学校づくり」の取り組みなど、様々な理由があるようだ。一方で、個々の学校がそれぞれに特色化を推し進めた結果、授業時数設定の多様化が進んだというだけではないこともうかがえる。特色ある学校づくりによって多様性が増しうるという改革の方向性にもかかわらず、地区ごとの取り組みや児童・生徒の学力に対する社会的な関心への配慮にも基づいて、授業時数が設定されていると考えられる。

■図３－８　授業時数設定にあたっての工夫（小学校／年間総授業時数タイプ別）



注）複数回答。

第２節

時間割設定の工夫

2002年度から導入した工夫では、小学校は「従来より１時間多く授業する曜日がある」46.9％、中学校は「定期テストの回数や日数の削減」35.8％が最も多く、小・中学校ともに「学期や月ごとに異なる時間割」「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」が続く。

完全学校週５日制の実施や授業時数の削減、時間割の弾力的な編成が認められたことを受けて、それぞれの学校では時間割設定にあたってどのような工夫を行ったのだろうか。

図３－９のように、小学校でとられている時間割設定の工夫は、「朝読書など教育課程外の学習活動」83.3％が最も多く、「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」71.8％、「ノーチャイムなどチャイムの見直し」57.5％と続いている。しかし、これら３つの工夫は「学年で統一した時間割」とともに前年度以前から行われていた割合の高いもので、土曜休業が導入されていく過程で取り組まれたり、近年の新しい教育観のもとで学校の組織的な見直しの一環として取り組まれたりしてきた工夫である。

2002年度から導入された工夫としては「従来より１時間多く授業する曜日がある」46.9％が最も多く、「学期や月ごとに異なる時間割」40.3％、「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」23.5％と続いている。これらの工夫は授業日数の削減に伴ってとられた取り組みといえる。時間割の弾力的な編成の例として注目されている工夫は、「２時間続き等のブロック制」が42.0％（今年度からは14.0％）、「30分や60分等の弾力的な授業時間」が40.2％（今年度からは16.8％）、「15分程度のモジュール方式」が24.8％（今年度からは13.4％）で、小学校では時間割を弾力的に編成する工夫もある程度は取り組まれている。

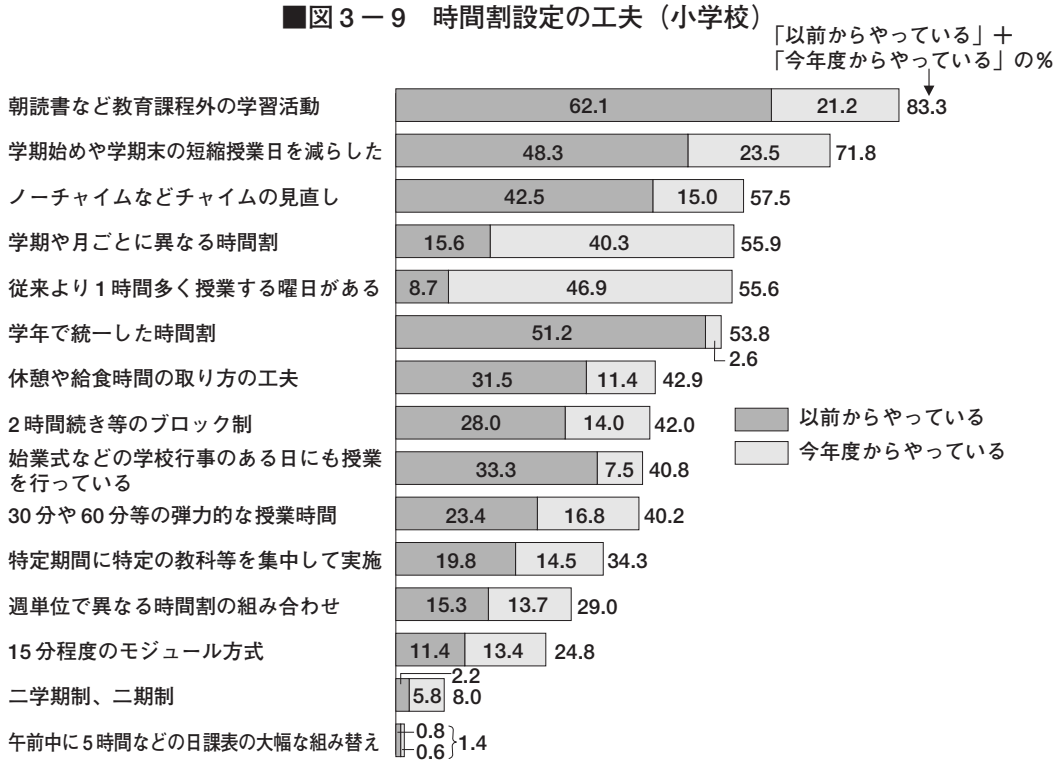
一方、中学校でとられている時間割設定の工夫は、**図３－10**のように「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」70.9％が最も多く、「朝読書など教育課程外の学習活動」70.1％、「学期や月ごとに異なる時間割」67.9％、「定期テストの回数や日数の削減」55.9％と続いている。

2002年度から導入された工夫としては「定期テストの回数や日数の削減」35.8％が最も多く、「学期や月ごとに異なる時間割」34.7％、「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」29.4％と続いている。時間割の弾力的な編成としては、「２時間続き等のブロック制」が22.3％（今年度からは7.0％）、「25分や75分等の弾力的な授業時間」が7.5％（今年度からは5.3％）、「20分程度のモジュール方式」が3.3％（今年度からは2.8％）となっており、これらは小学校に比べて非常に少ない。時間割を弾力的に編成する工夫は、教科担任制の中学校では教科間の調整が必要なため、取り組みがなかなか難しいようだ。このように、中学校で取り組まれている時間割設定の工夫は、完全学校週５日制への対応が中心であるといえよう。

なお、文部科学省から「学びのすすめ」が出されて以降注目されている「朝読書など教育課程外の学習活動」は、実は小・中学校ともに以前から多くの学校で取り組まれていた。

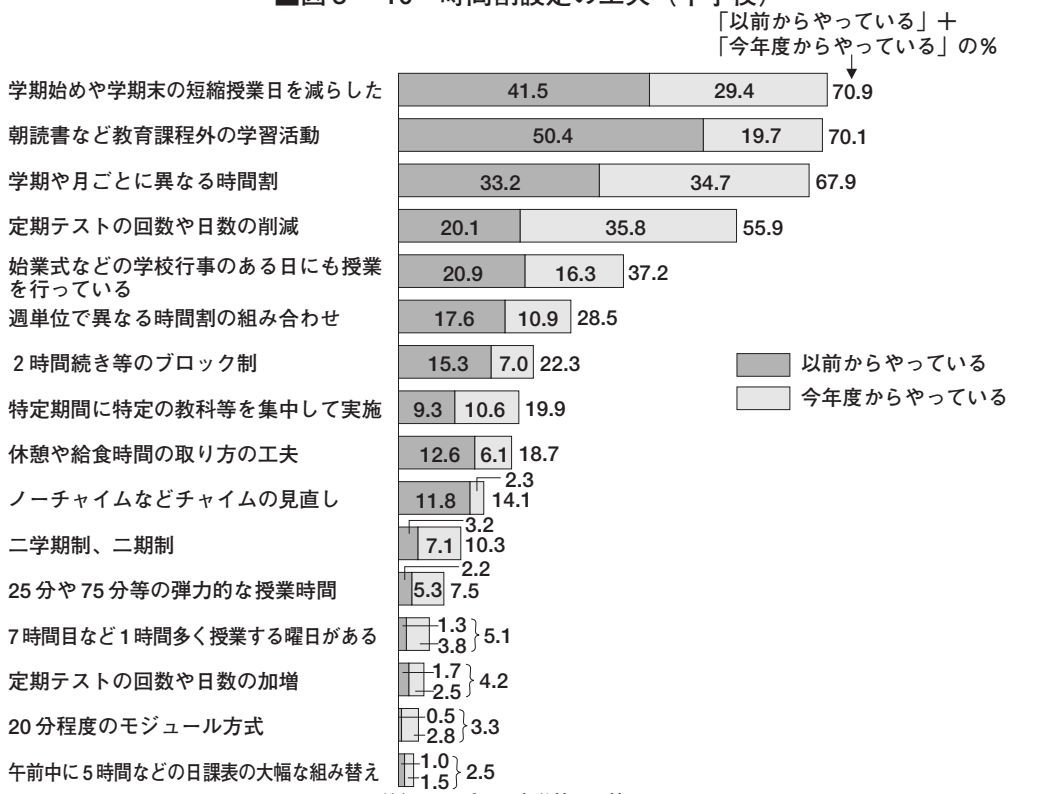
ところで、年間総授業時数が標準どおりの学校と標準を超えている学校では、取り組んでいる時間割設定の工夫に違いがあるのだろうか。

■図３－９　時間割設定の工夫（小学校）



注）サンプルは小学校 642 校。

■図３－10　時間割設定の工夫（中学校）

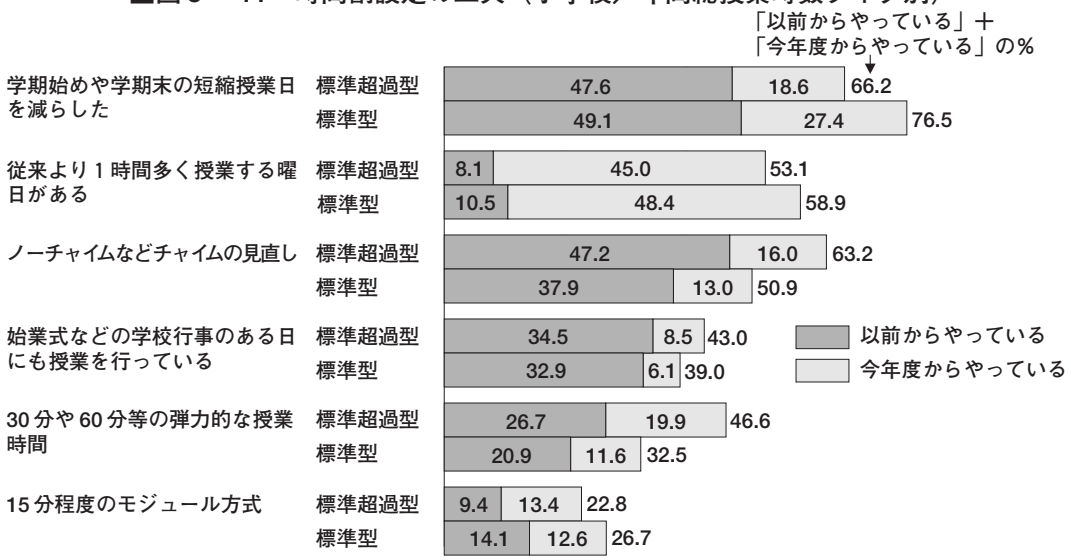


注）サンプルは中学校 603 校。

小学校では**図３－11**のように、「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」や「従来より１時間多く授業する曜日がある」は、「標準型」の学校のほうが５～10ポイント程度多い。授業日や授業時間を増やすような工夫は、標準授業時数以上に時数を確保するためというよりは標準授業時数を確保するための取り組みといえよう。また、「ノーチャイムなどチャイムの見直し」や「30分や60分等の弾力的な授業時間」は、「標準超過型」の学校のほうが15ポイントほど多い。時間割を弾力的に編成する工夫は、標準を超えた授業時数を設定する際の取り組みといえよう。

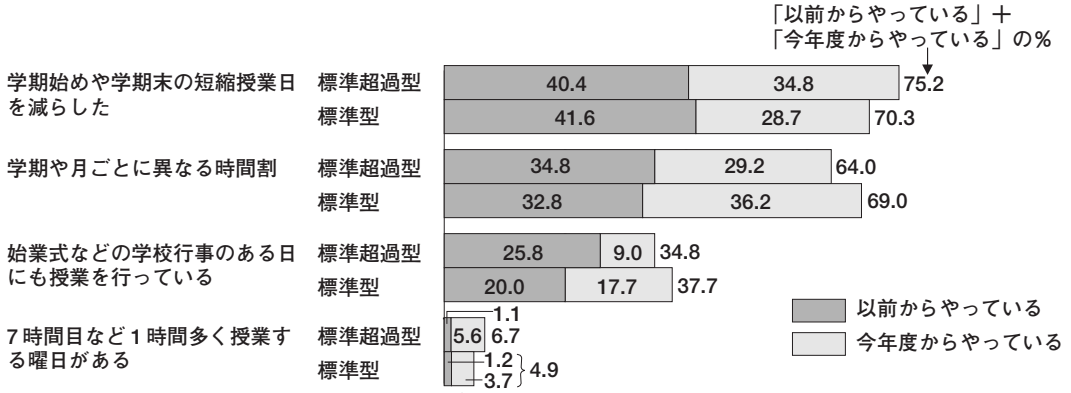
中学校では**図３－12**のように、「標準型」と「標準超過型」で差がみられる場合でも、数ポイントの違いにとどまっており、またその差に一貫した傾向もみられない。ほとんどの学校で授業時数が標準どおりの設定になっていることや、超過する場合でも35時間程度までであることなどから、授業時数を標準に設定しているかどうかで取り組む時間割設定上の工夫が変わるのではなく、どの中学校も授業時数確保に同じような工夫をしているといえよう。

■図３－11　時間割設定の工夫（小学校／年間総授業時数タイプ別）



注）サンプルは標準超過型307校、標準型277校。

■図３－12　時間割設定の工夫（中学校／年間総授業時数タイプ別）



注）サンプルは標準超過型89校、標準型481校。

第３節

学校行事などへの影響

1. 学校行事の実施状況

「運動会」はほとんどの小・中学校で行われている。小学校では、「遠足」「文化祭（学芸会、音楽会）」が８割以上行われており、中学校では、「文化祭（学芸会、音楽会）」「校外での宿泊を伴う行事（修学旅行、林間学校など）」「合唱などのコンクール」が８割以上行われている。

完全学校週５日制の導入でしばしば耳にするのが「学校行事にあてる時間がない」「学校行事を減らさざるを得ない」といった学校行事などに関する悩みである。では、現在、小・中学校ではどのような学校行事をどの程度実施しているのだろうか。また学校行事やその他の特別活動について、学習指導要領の改訂を受けてどのような取り組みを行ったのだろうか。

小・中学校でどのような学校行事が年に何回行われているかを、**図３－13**と**図３－14**からみていこう。なお、学校行事は学年によって行われているものや回数が異なるため、学校行事の実施状況については教師調査でたずねている。そのため、回答者が主として受け持っている学年での学校行事の回数をまとめたものなので、そのまま個々の学校の特徴をあらわしているとはいえないことを前もって断っておく。

１）遠足

小学校では46.8%が「年に１回」、41.6%が「年に２回以上」行っている。「やっていない」という回答も9.9%あり、学年別には7.1～14.5%が「やっていない」と回答していることから数パーセントの小学校では全く遠足を行っていないようだ。中学校では37.5%が「年に１回」行っているが、54.4%が「やっていない」で学年による違いを考慮しても約半数の中学校で遠足を行っていない。また小・中学校ともに学年が上がるにつれて実施回数が減っている。これは後にみるように、上級学年では「校外での宿泊を伴う行事（修学旅行、林間学校など）」が行われる割合が高くなることと関係していると思われる。

２）運動会

小・中学校ともに９割以上の学校で「年に１回」行われている。「やっていない」という回答が、小学校で0.5%、中学校で4.0%となっており、最も多くの学校で行われている学校行事である。

３）文化祭（学芸会、音楽会）

小学校では「年に１回」が72.1%、「複数年に１回」が7.8%、「やっていない」が14.3%で、中学校では「年に１回」が85.9%、「やっていない」が9.5%と、「運動会」に次ぐ定番の学校行事である。

４）校外での宿泊を伴う行事（修学旅行、林間学校など）

小学校では47.2%が「年に１回」、44.5%が「やっていない」で、中学校では76.3%が「年に１回」、11.7%が「複数年に１回」、10.3%が「やっていない」となっている。しかし、これは先にも述べたように回答者が主に受け持っている学年の違いの影響を受けている。小学校では小４生以下で「複数年に１回」以上行っている割合は２～３割程度なの

に対して小５生、小６生では９割前後が「複数年に１回」以上行っており、中学校でも中１生と中３生では10ポイントほど中３生のほうが行っている割合が高い（図省略）。

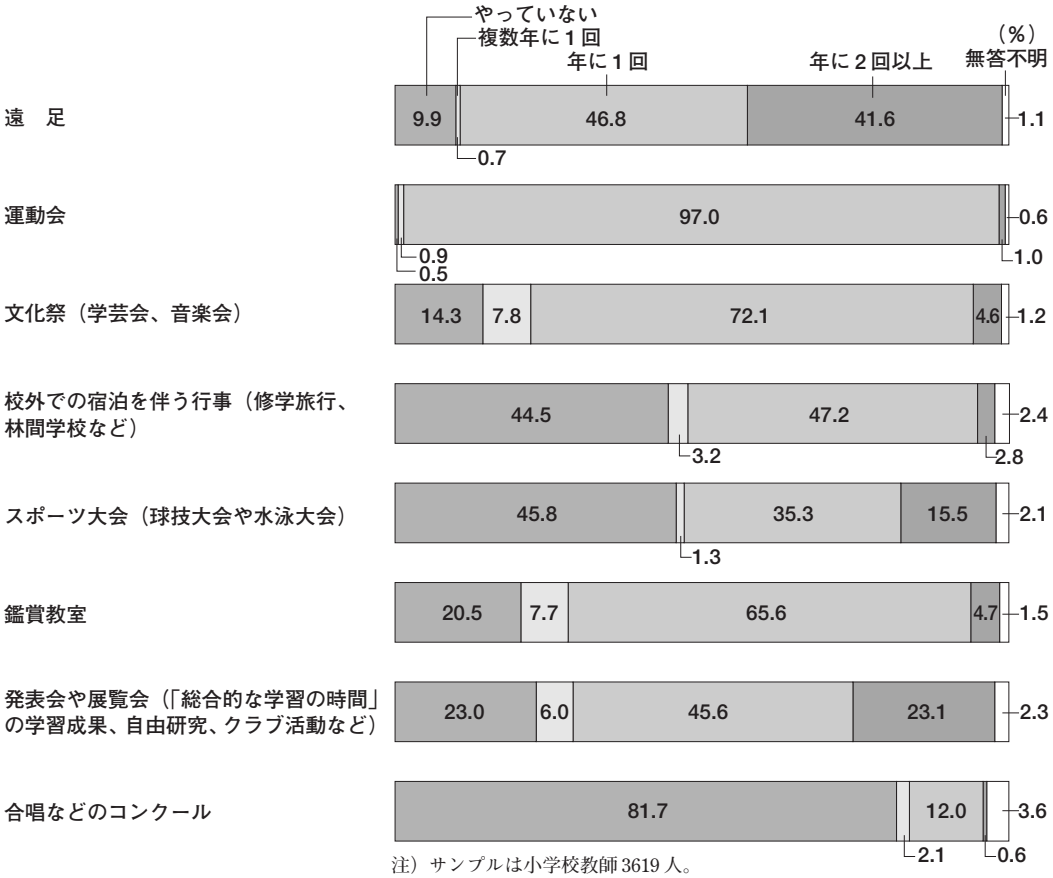
５）スポーツ大会（球技大会や水泳大会）

小学校では「年に１回」が35.3%、「年に２回以上」が15.5%、「やっていない」が45.8%で、中学校では「年に１回」が46.3%、「年に２回以上」が27.6%、「やっていない」が23.0%と、小学校と中学校で異なる傾向がみられた。学年別にみても、小学校では学年が上がるにつれて実施率が高まるが、中学校では学年による差がなかった。

６）鑑賞教室

小学校では65.6%が「年に１回」、7.7%が「複数年に１回」、20.5%が「やっていない」

■図３－13　学校行事の実施状況（小学校教師）



注）サンプルは小学校教師3619人。

で、中学校では51.8%が「年に１回」、13.3%が「複数年に１回」、28.2%が「やっていない」であった。

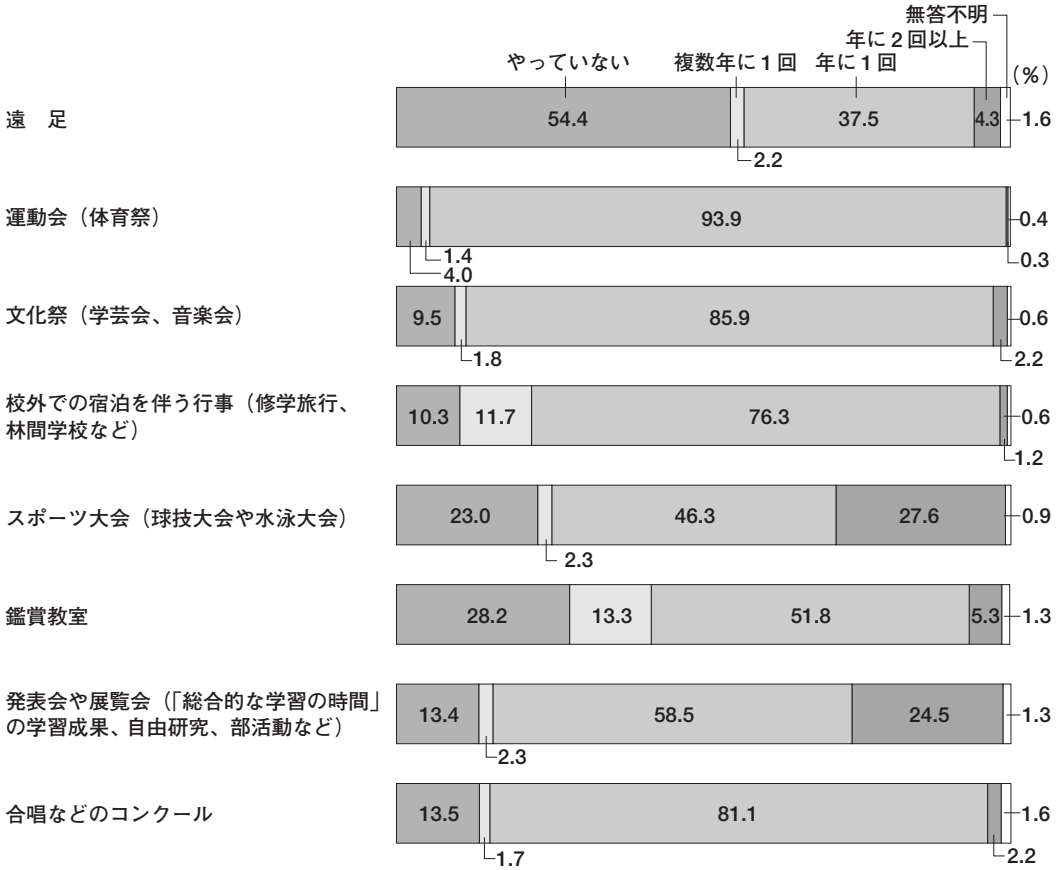
７）発表会や展覧会（「総合的な学習の時間」の学習成果、自由研究、クラブ／部活動など）

小学校では「年に２回以上」が23.1%、「年に１回」が45.6%、「複数年に１回」が6.0%、「やっていない」が23.0%で、中学校では「年に２回以上」が24.5%、「年に１回」が58.5%、「複数年に１回」が2.3%、「やっていない」が13.4%と、小・中学校ともに学校によって実施状況が様々である。小学校では学年が上がるにつれて、実施回数が増えている。

８）合唱などのコンクール

中学校では「年に１回」が81.1%と、運動会、文化祭に次ぐ定番の学校行事だが、小学校では「やっていない」が81.7%と、ほとんど行われていない。

■図３－14　学校行事の実施状況（中学校教師）



注）サンプルは中学校教師3388人。

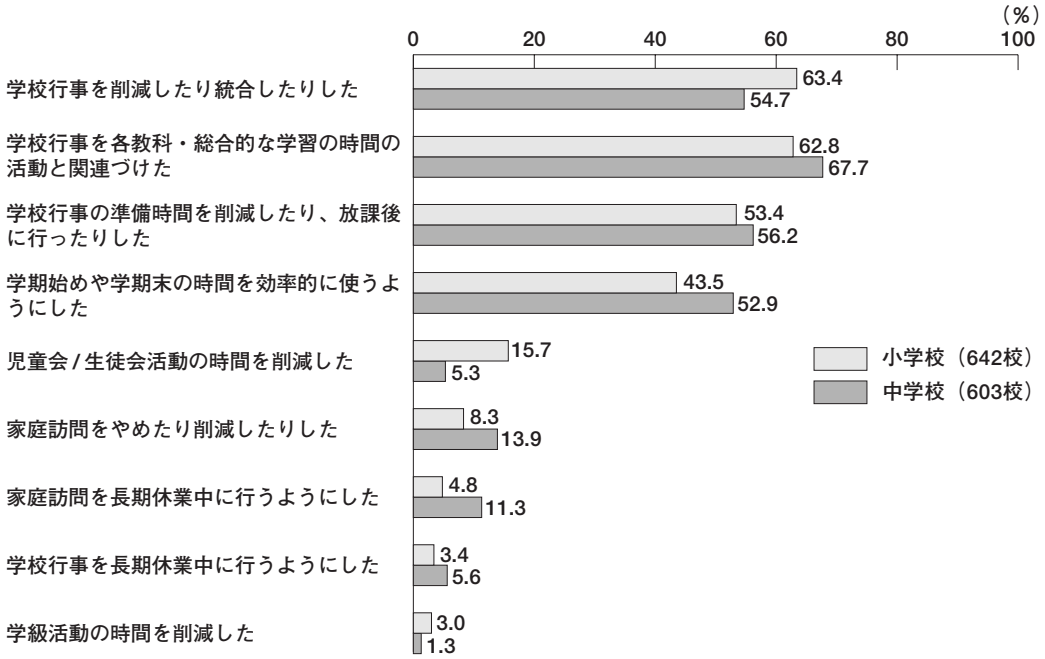
2. 特別活動などの変化の様子

学校行事などの特別活動の変化については、小学校では「学校行事を削減したり統合したりした」が63.4％、中学校では「学校行事を各教科・総合的な学習の時間の活動と関連づけた」が67.7％となっており、多くの学校で学習指導要領の改訂に対応している。

次に、学習指導要領の改訂を受けて、学校行事をはじめとする特別活動などの行い方にどのような変化があったのかをみていこう。

図３－15のように、小学校では「学校行事を削減したり統合したりした」が63.4％と最も多く行われた取り組みで、「学校行事を各教科・総合的な学習の時間の活動と関連づけた」62.8％、「学校行事の準備時間を削減したり、放課後に行ったりした」53.4％と続いている。中学校では、「学校行事を各教科・総合的な学習の時間の活動と関連づけた」が67.7％と最も多く行われた取り組みで、「学校行事の準備時間を削減したり、放課後に行ったりした」56.2％、「学校行事を削減したり統合したりした」54.7％と続いている。小学校と中学校を比較すると、「学校行事を削減したり統合したりした」と「児童会／生徒会活動の時間を削減した」は小学校のほうが、「学期始めや学期末の時間を効率的に使うようにした」と「家庭訪問をやめたり削減したりした」や「家庭訪問を長期休業中に行うようにした」は中学校のほうが10ポイント前後多い。完全学校週５日制による特別活動などへのしわ寄せへの対応のしかたは、小学校と中学校で若干異なっている。

■図３－15　特別活動などの変化（小・中学校）

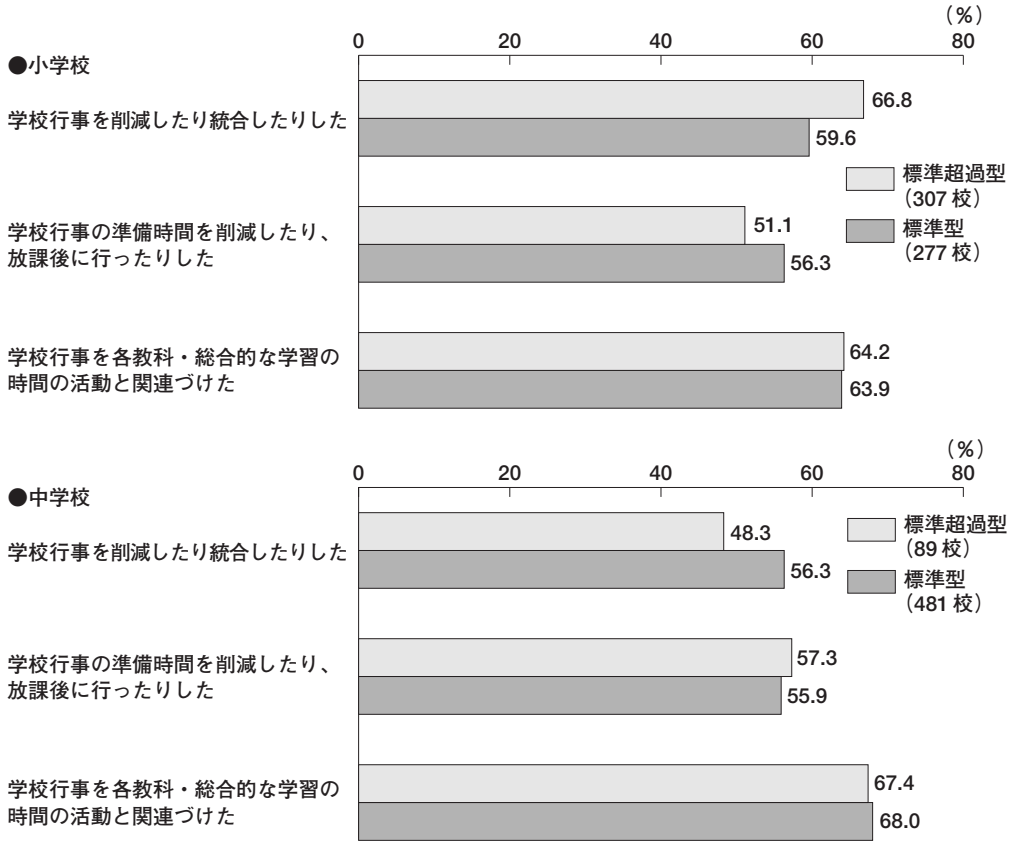


注）複数回答（ただし「その他」は図から省略した）。

年間総授業時数が標準どおりの学校と標準を超えている学校で、学校行事の変化の様子に違いがあるかどうかを**図３－16**でみてみると、小学校では「学校行事を削減したり統合したりした」は「標準超過型」の学校が66.8％で「標準型」の学校より7.2ポイント多いのに対して、「学校行事の準備時間を削減したり、放課後に行ったりした」は「標準型」が56.3％で「標準超過型」より5.2ポイントほど多い。中学校では小学校とは異なり、「学校行事を削減したり統合したりした」は、「標準型」が56.3％で「標準超過型」より数ポイント多い。また「学校行事を各教科・総合的な学習の時間の活動と関連づけた」は小・中学校とも差がみられなかった。

小学校の「標準超過型」には、学校行事などの特別活動の時間を確保するケースが多くみられた。学校行事やその準備も授業時数に組み込んでいる分、「標準型」より学校行事は精選されたが、その準備時間が削減されたり放課後に行ったりはしていないと考えられる。中学校では、「標準型」の学校の場合、教科、領域等の授業時数だけでなく、学校行事も含めて学校で行う諸活動を平均的に縮小することで、完全学校週５日制に対応したと考えられる。

■図３－16　特別活動などの変化（小・中学校／年間総授業時数タイプ別）



注）複数回答。10項目中、3項目を図示した。